努力する才能に恵まれたと思う

外科医 渡邊剛

金沢大学教授・東京医科大学教授
文・吉原清児　写真・永田忠彦

医師に必要なのは「育ちのよさ」

「小学校4年の2学期から塾に通い、中高6年間は麻布だったんです。しかし成績は一学年300人中150番くらいで『中の中』、いたって平凡な生徒でした」

そう語るのは、金沢大学教授（東京医大教授兼任）渡邊剛である。神業的な手術テクニックで、「実在のブラック・ジャック」と呼ばれる心臓外科医だ。

最も得意とするのは「心拍動下冠動脈バイパス手術」。この手術は、心臓を動かしたままの状態で血管（冠動脈）の病変部を迂回するように直径2ミリの別の血管をつなぎ合わせ、バイパスを作るものだ。糸がもつれたり、一針でも指先の動きが狂ったりしたら即、患者の死につながりかねない。

「難しい手術でも確実、迅速に成功させるのが超一流の技です」

と言う渡邊は、これまでに難度の高いこの手術を1200例手がけ、1195人の命を救った。手術成功率は99・5%。これは文句なし、「日本一」の実績だ。

47歳。東京都出身。医師歴23年。この天才は、どんな道を歩いてきたのか。

医師という職業に求められる資質の一つに、「育ちのよさ」がある。英語で言えば、ディグニティだ。

これについて、慶応義塾大学の創始者福沢諭吉は「君子の身の位」と訳したが、要は、内面に備わった威厳とか品位といった意味だろう。

教授室で向き合った手術着姿の名医には、まさにそうした育ちのよさが感じられた。腕白だが素直な子だったという渡邊は、幼稚園、小学校とカトリックのミッション・スクールに8年間通った。1学年60人で2クラス。男女比1対2で女の子のほうが多く、受験勉強は二の次で、徹底したマナー教育を叩き込まれた。

「4歳から12歳までは、祈りで始まり、祈りで終わる学園生活でした。食事の前には1分間のお祈りを捧げ、下校時は先生と生徒が『ごきげんよう』と丁寧に挨拶をするんです」

――いじめはなかった？

「僕がクラス一のいじめっ子だった（笑）。女の子はもちろん、男の子もケンカなんかしたことがない子ばかりでした」

一人ひとりが神様から愛されていることを知り、自分を大切にし、また自分と同じように周囲の人びとを大切にする。三つ子の魂ではないが、幼い日々に受けた人間教育が、心臓外科医となった今日に生きている、と渡邊は語る。

しかし、医師になるためには受験競争を乗り越え、難関の医学部に合格しなけ

ればならなかった。'71年春、前述した麻布学園中学に入学。麻布は中高一貫教育の男子校だが、開成や武蔵とともに「東京の御三家」と呼ばれていた。

「今と違い、当時の麻布は校則もなく、自由でのんびりした校風でした。開業医のバカ息子風の甘いヤツがいる一方で、公立小学校出身の荒っぽい子もけっこう多かった」

中学に入って、いきなりケンカした相手は強かった。「なんだ、お前！」と手を出したら、逆にぶん殴られた。自分よりケンカの強いヤツがいる上に、頭がよくて、こいつらには絶対かなわないなと一度ならず思い知らされた。

「思春期の僕は、そこで初めて『社会』というものを知ったんです。しかし、自分の好きなように6年間を過ごせたという意味では、麻布は好きな学校でした」

そう振り返ったあと、渡邊は続けた。

「僕の学年は、現役と一浪を含めて東大合格者が106人。寝転んで本を読み全部記憶しちゃうヤツ、電話帳を簡単に覚えちゃうヤツ、試験の前に『これ、ヤマだよ』とざっと読み、いい点が取れるヤツ。彼らが『教科書なんか2回読んだら覚えるだろう』と言う。ところが僕は教科書を3回、4回読んでも覚えられなかった」

ちょうど大学受験の準備を始めた高校2年の頃だ。クラスメートと比べ、記憶力の悪さに自信喪失し、担任に「どうしたらいいか」と相談した。その教師は、

「彼らは頭はいいけれど、努力する才能は持ち合わせていない。お前の持ち味は、努力する才能なんだよ」

と諭した。じゃ、頭が悪くても努力すればいいんだなと素直に思った。

東大理Ⅲの頭脳はいらない

同じ時期、一冊のマンガと出会った。手塚治虫作『ブラック・ジャック』。この主人公は、神業の天才外科医の代名詞だ。

「ブラック・ジャックのカッコよさは天才的な技とヒューマニティです。僕はこっちで行こうと心に決めた。それからは迷いなく、一本道でした」

とはいえ、東大理Ⅲは偏差値が高過ぎて「最初から無理」だったし、東京にある自宅から比較的近いという理由で現役受験した筑波大学医学部には不合格。医学部受験から医者の出世レースがスタートするとしたら、最初の一歩で出遅れたことになる。だが、その後の渡邊の歩みは、受験の失敗だけで人生が決まるものではないことを教えている。

「僕の好きな言葉は『ご縁』と『情熱』です。人と人を結ぶ縁に恵まれ、僕の今があると思う」と渡邊は言う。

一浪後、金沢大学医学部に合格。6年後には医師国家資格取得。心臓外科医の道を志した渡邊は、'89年6月から2年半、ドイツ・ハノーファー医科大学留学中に、世界的な外科医2人から手術を学び、30代なかばから天賦の才能が開花した。

ちなみに、この世界ではいま、トップクラスの名医の集まりが知られている。その名も「ツー・ハンドレッド・クラブ」。年間200例の心臓手術を一人で執刀し、治療成績が抜群の超一流外科医の会、という意味だ。なかでも、

「彼は心臓手術の天才だ」

と、第一線外科医から別格視されているのが、渡邊その人に他ならない。

育ちのよさと情熱、スキルと知識力、そして直観力（ひらめき）――これが、一流外科医の5つの条件だと渡邊は言う。4番目の知識力以外、いわゆる受験エリートの頭のよさとは別次元のものだ。

「心臓外科に関しては、記憶力のよさと手術の巧さは全く別物。だから、東大理Ⅲに合格する頭脳はいらない。むしろ必要なのは創意工夫の能力と手先の器用さ。加えて、目標に向かってとことんやり抜く情熱があれば十分なんです」

現在、東京と金沢を飛行機で往復し、週平均5～6件の心臓手術をこなす。とくに情熱を注ぐのが、目覚めたままの患者にメスを入れるアウエイク（覚醒）手術である。局所麻酔で胸を小さく切開する分、全身麻酔下の心臓手術より患者の負担も軽く、回復が早いからだ。ただし、きわめて高度な技量が要求されるため、渡邊以外、日本中の心臓外科医の誰一人として手を出せないのだ。

憧れのヒーロー、ブラック・ジャックのように、心臓を病んだ人をいかに多く、その卓越したメスで救えるか。心臓に恋をした渡邊が最後にこう言った。

「僕の夢はね、紺色のポルシェ928で日本国中どこへでも出かけて行き、難しい手術を成功させること。お金や名誉より、患者さんの喜ぶ顔が最高の報酬です」

自由な校風の下、秀才たちが集まっていた麻布高校2年生のころ。

PROFILE

'58 東京都府中市生まれ
↓
'65 晃華学園小学校入学
↓
'71 麻布中学校入学
↓
'74 麻布高等学校入学
↓
'78 金沢大学医学部入学
↓
'85 金沢大学医学部大学院入学
↓
'89年、同大学院修士課程修了。ドイツ、ハノーファー医科大学留学後、金沢大学、富山医科薬科大学を経て、2000年、金沢大学医学部第一外科教授、'05年、東京医科大学心臓血管外科教授兼任。